

世の中、長くストップしていますね。過去にない休校の長さ、社会の閉塞感に不安になってしまっている人はいませんか。この不安にまきこまれないためには、どうしたらいいでしょうか。

日本人宇宙飛行士の野口聡一さんの言葉を紹介いたします。

「どんなに悩んで苦しんでも、時間しか解決してくれない問題というのはあるものです。じたばたしても状況を悪くするだけということも多い。だから無闇に問題を解決しようと思わず、日々やらなければいけないことをコツコツとやっていくしかないでしょう。」
みなさんが今やらなければいけないことをコツコツとやることです。いつか時が来たときに、社会で役に立つ人になるために。日々コツコツ、力をためましょう。

課題1・教科書「排球、そして千利休」(六〇ページ～六八ページ)を読んで、プリントに取り組みなさい。答え合わせをし、間違えた問題は赤ペンで正しい答えを書きなさい。

課題2・「マナトレ」問題：取り組んだあと、答え合わせをして、間違えた問題は赤ペンで正しい答えを書きなさい。

※課題の評価についてはこのプリントの裏面を参考にしてください。

◆◆現代文A 課題の評価について◆◆

評価	提出状態	社会人レベル
A	<ul style="list-style-type: none"> 間違えた問題に赤ペンで正しい答えを書いてある。 問題文の重要な箇所が線が引いてある。 自分なりに調べたメモなどが記入してある。 	仕事を安心して任せられる。一緒にやっていきたい。
B	<ul style="list-style-type: none"> 間違えた問題に赤ペンで正しい答えを書いてある。 	仕事を任せてもいい。
C	<ul style="list-style-type: none"> 丸つけだけしてある。 	仕事を任せるのが不安。
D	<ul style="list-style-type: none"> 丸つけをしていない。 答えを丸写ししている。 	仕事を任せられない。
E	<ul style="list-style-type: none"> しめ切りを過ぎている。 やっていない箇所がある。 	採用できない。

今回、そしてこれまでの課題についての評価基準です。
過去の評価は変えられませんが、未来の評価を変えることはできます。
できることからコツコツがんばろう！

本文理解

1 筆者が「若いころ好きだった遊び」(60・1)とはどのような遊びか。簡潔に答えなさい。

--	--

2 ①「ホームルーム」、②「テーマ」、③「サマーフェスティバル」(60・2)を日本語に置き換えた言葉を、本文中から抜き出しなさい。

③	①	②
---	---	---

3 「そんな分野」(61・5)とは、どのような分野か。本文中から二十六字で抜き出しなさい。

4 「カタカナ語多用分野」(61・6)は、どのように探すと見つかりやすいのか。簡潔に書きなさい。

--

8 「そういう言葉」(63・1)とはどのような言葉か。本文中の表現を使って書きなさい。

--

9 『「わいよねえ。』と、笑いながらぶる震えてみせたりした」(65・4)とあるが、このときの心情として適切なものを選びなさい。

- ア 「道」という大義名分のもと、千利休のように理不尽な理由で切腹させられるような野蛮な時代はおそろしいという気持ち。
- イ 茶道も武道も、ささいなことに命をかけて取り組むことが求められるが、どちらにも愚かさには変わりがないという気持ち。
- ウ たかが野球のことにまで「死」という表現を用いるような、崇高な武士道の精神が今日まで残っていることに感激する気持ち。
- エ 墨に出られなかっただけのことを「死」とまで表現する日本文化の堅苦しさは、自分たちには到底理解できないという気持ち。

10 「わたし」が小説を書き始めてから、カタカナ語をできるだけ使わないようにしようと思うようになった心境の変化を表した部分を、65ページから四〇字で探し、初めと終わりの五字を抜き出しなさい。(句読点や記号含む)

--	--

第二段落 (62・5～65・5)

5 「なんだかどきどきしました」(61・13)とあるが、その理由として適切なものを選びなさい。

- ア バレーボールまで日本語に置き換えられるなら、日本語で表現できない言葉などないと感激したから。
- イ バレーボールの日本語の呼び方を知ったことで、その競技の目的について意外な発見をして感動したから。
- ウ バレーボールを日本語で表した「排球」という言葉の響きから、日本語の美しさに気づかされたから。
- エ バレーボールという競技には、今まで知らなかったおもしろさがあると気づいてうれしかったから。

6 「今わたしたちが使っているような意味での『愛』」(62・7)とは、どのような概念での「愛」のことか。本文中から一〇字以内で抜き出しなさい。

--

7 『愛』という文字」(62・11)の説明として適切なものを選びなさい。

- ア 「愛」という字は、昔から、現在と同じ意味で使われていた。
- イ 「愛」という字は、昔は「かなしい」と読むことが多かった。
- ウ 「愛」には、「泣きたくなるほどつらい」という意味もある。
- エ 「愛」という概念が輸入されたとき、「愛」という字もできた。

11 「クールではない、どちらかといえばキュートなタイプ」(66・6)を、筆者はどのように書き直したのか。本文中から抜き出しなさい。

--

12 「プロフィール」(66・7)に当たる日本語を本文中から抜き出しなさい。

--

13 「いやだよつ、これ」(67・2)とあるが、このときの「わたし」の心情として適切なものを選びなさい。

- ア ステレオタイプな表現が多用された文章に、自分の文章力の無さを痛感する気持ち。
- イ 日本の言葉を使おうと思って書いた文章にカタカナ語が混じっているのを見て、あぜんとする気持ち。
- ウ カタカナ語がためらいなく使われた文章を見て、きざつたらしくてたまらないと思う気持ち。
- エ カタカナ語に拘泥している自分に気がついて、日本の言葉を使うことをあきらめようと思う気持ち。

14 「言葉は、文化をしょっています」(67・9)とあるが、どういふことか。簡潔に説明しなさい。

--

15 「そのこと」⑦・⑬とはどのようなことか。本文中の言葉を用いて説明しなさい。

16 「嬉しいことでもありませんし、ちよつと癪なことでもありません⑦・⑬とあるが、どのような気持ちか。「嬉しい」「ちよつと癪」という気持ちが具体的にわかるように説明しなさい。

構成と主題

1 本文の内容を次のようにまとめた。空欄に当てはまる語句を本文中から補いなさい。

第一段落 (60・1~62・4)

高校生のころ、① [言葉を使わない遊びをよくした。バレーボールのことを] ② [「と呼ぶと知り、自分の陣地からボールを] ③ [ことを目的にしている競技だと気づいた。

第二段落 (62・5~65・5)

ロマンティック・ラブの④ [が輸入されて、はじめ日本人は「愛」という④]を知った。元来日本になかった概念が輸入されたとき、それを日本語に⑤ [するのは難しい。野球の「アウト」を「死」とまで表現するのは、日本の⑥ [に關係するのかもしれない。

⑦ [が切腹させられたことを知り、わたしとSちゃん「日本文化って、堅苦しくて不便」だと言いつつわたしは小説の推敲をするとき、① [語をためらいなく使った文章を読み返して「いやだよ、これ」と思い、できるだけ⑧ [の言葉に置き換える。いつの間にか日本の言葉に⑨ [するようになっていく。

第三段落 (65・6~67・8)

⑩ [は文化をしょっている。自分の中には知らないうちに、自国の⑫ [が根を張っていたと、小説を書いてはじめて知った。それは嬉しいことでもあり、ちよつと癪なことでもある。

2 「千利休」に対する「わたし」の反応は、女子高生のころと現在とで、どのように変化したか。簡潔に説明しなさい。

解答

前の課題の解答も含まれています

ことばと文化 p.29 p.32 問題 p.60 p.68 教科書

排球、そして千利休

言葉の学習

- 1 ①じゆくたつ ②さが ③いこう ④しゅうぎゅう
5 ①行くき着くところまで論じ、考えを極める。
2 ②露骨すぎて、情味や含みがない。
3 ①aか bくし ②aもよお bかいさい
4 イ
5 ①行くき着くところまで論じ、考えを極める。
6 ①難しい技をややすやすとやってのける。
7 イ
8 ①日本に元々背景となる概念も、概念を生み出す文
化もないような言葉。

解説

- 1 言葉の学習
1 ①カタカナ ②排球 ③押し出す ④概念 ⑤翻訳
2 ⑥道 ⑦千利休 ⑧日本 ⑨拘泥 ⑩言葉 ⑪文化
4 「切腹」は「腹を切る」こと。下の漢字が上の漢字の目的
や対象を表す構成である。同じ構成はイの「登山」(山
に登る)。ア「表現」は上下が似た意味。ウの「非常」は
「非・不」など、上が打ち消しの漢字。エの「善悪」は、
上下が反対の意味。

9 エ
「カタカナ」だしてきた
美人ではないけれど、感じのいいあたたかな顔立ち。
よこがお
10 11 12 13 14
14 ①言葉は、それぞれの国の概念や文化から生まれる
ということ。

15 ①自分の中には知らず知らずのうちに、自国の文化
が根を張っていたこと。
16 ②女子高生のころはわからなかった日本の文化が理
解できるようになった嬉しさと、当時は否定していた
日本の文化が知らず知らずのうちに自分の中に存在し
ていたことに対する悔しさが入り混じった気持ち。

17 ①「嬉し」と感じる理由は、直接書かれていないが、「知
らず知らずのうちに、自国の文化が根を張っていた
……」⑦⑧に着目する。筆者が知らないうちに、日
本文化を理解できるようになっていったということが読
み取れる。このこと自体は「嬉し」が、一方で、若い
ころは堅苦しいものとして否定していたはずの日本文
化が、知らず知らずのうちに自分に入り込んでいたと
いうことは、「頼なこと」と感じているのである。

3 直前の一文に「分野」という言葉があることに着目す
る。この部分から指定字数で抜き出す。
4 直前の一文「カタカナ語は、おおかた明治以降に……行
き当たります」に着目してまとめる。
5 筆者は「排」という文字の意味から、バレーボールとい
う競技の目的を知ったのである。「押し出すことを目的
にしているんだ」「⑥⑦からは、感動が読み取れる。
ア(×)「日本語で表現できない言葉などない」が、競
技の目的を知った感動とずれているので、誤り。
イ(○)「競技の目的について意外な発見をして感動」
とあるので、正解。
ウ(×)「日本語の美しさに気づかされた」が、競技の
目的を知った感動とずれているので、誤り。
エ(×)「競技の「目的」を知った感動であり、「おもしろ
さ」ではないので、誤り。
6 同じ段落の内容を読み取る。昔の日本には、「惚れ
る(×)情」などの概念や言葉はあったが、「ロマン
ティック・ラブ」という意味での「愛」という言葉は
なかったのである。
7 6で見たように、昔の日本には、今と同じような意味
での「愛」という言葉はなく、「愛」は、「愛している」と
いう読みかたではなく、「愛しい」という読みかたをす
ることが多かった。「⑥⑦」ということである。
ア(×)「現在と同じ意味で使われていた」が、誤り。
イ(○)「愛しい」という読みかたをすることが多かつ
た「⑥⑦」とあるので、正解。
ウ(×)「泣きたくなるほどつらい」は、「愛」ではなく
「悲・哀」の意味なので、誤り。
エ(×)「愛」という文字は昔からあったので、誤り。

- 9 直前の内容から、女子高生だった筆者たちは、日本の
文化を「堅苦しくて、不便な感じ」⑧⑨⑩だと思い、利
休が切腹しなければならなかったことを理不尽と感じ
ていることがわかる。野球のルールにまで「死」という
言葉を用いることは理解しがたいし、同じような堅苦
しさを感じているのである。「笑いながら」震えている
ので、恐ろしいと思っているのではない。
ア(×)筆者は利休の死に堅苦しさを感じたのであ
り、「野蛮な時代は恐ろしい」と感じて震えたのでは
ないので、誤り。
イ(×)「堅苦しくて不便な感じ」⑧⑨⑩だったのであり、
「どちらか悪かきには変わりがない」ということは
述べられていないので、誤り。
ウ(×)「こわいよねえ」と、笑いながら「ふるえてい
る様子から、「感激」する気持ちは読み取れないの
で、誤り。
エ(○)「堅苦しくて、不便な感じ」「こわいよねえ」な
どから、「自分たちには到底理解できない」という気
持ちは読み取れるので、正解。

10 筆者は、小説を書く人間となつて、女子高生のときに
遊びでやっていたのとは違って、自然に「カタカナ語
を使わない」というやり方が、むくむくと体の奥の方
から、わきだしてきた「⑧⑨」というのである。この
部分に心境の変化が読み取れる。
11 12 書き直して本になつた小説の表現は、六六ページ
の初めに書かれており、カタカナ語は使われていない。
ここから、推敲前のカタカナ語に該当する部分を抜き
出す。
13 10で見たように、小説を書くようになった筆者は、「カ
タカナ語を使わずに小説を書く」としていた。推敲

14 前に「ともかくどんどん進め」⑥⑩の文章は、「クール
だのプロフィールだ」というカタカナ語をためらいな
く使った「⑥⑦⑧⑨」のもので、それを読み返した筆者は「い
やだよつ、これ」と思つたのである。「しやらくさい」
⑦⑧⑨と言いつつカタカナ語を日本の言葉に置きかえ
る様子からは、ためらいなくカタカナ語が使われた文
章を、生憎気だたまらないものだと感じていることが
読み取れる。よつて、ウが正解。
15 直前の段落に「道」の概念をふくむ文化から生まれた
日本の言葉「⑥⑦」とあることから、言葉は、それが
使われる国の概念や文化から生まれるものだといふこ
とがわかる。また、「言葉」「文化」という言葉に着目し
て本文をさかのぼると、第二段落に、「日本ではないその
国の文化や概念にねざした言葉です」⑧⑨⑩という記
述もある。これらを参考にまとめてみる。
16 「嬉し」と感じる理由は、直接書かれていないが、「知
らず知らずのうちに、自国の文化が根を張っていた
……」⑦⑧に着目する。筆者が知らないうちに、日
本文化を理解できるようになっていったということが読
み取れる。このこと自体は「嬉し」が、一方で、若い
ころは堅苦しいものとして否定していたはずの日本文
化が、知らず知らずのうちに自分に入り込んでいたと
いうことは、「頼なこと」と感じているのである。